

拙堂會報

第7号

2019年12月1日発行

発行所
齋藤拙堂顕彰会

理事長 飯田 俊司
津市一身田豊野1406-197

拙堂塾への思い

顧問 齋藤 正和



拙堂会の事業として本年度から始まった拙堂塾について私の思いを申述べます。子孫の私が言うのもおこがましいのですが、拙堂は江戸末期において日本を代表する学者文人の一人であって、郷土が誇りにできる人物です。それは何で分かるかと言えば、戦前、日本中の中学校で漢文の教科書には必ず拙堂の文章が載っていました。また幕府は拙堂を抜擢して昌平黌の教授

にしようと思いましたが、津藩の恩義を優先して固辞したのでした。更に拙堂の文章や文学評論は中国において現在でも読まれており国際的です。

拙堂が先覚者であったと言えるのは藩校有造館の督学として積極的に洋学の導入を図り、洋学館を建て、学生を洋学学習のため江戸や長崎に派遣したことも分かります。また当時、泰平に溺れた武士階級に対し日本の国民を外圧から守る責務があること、その為に私欲に迷わず責務を果たさねばならぬと力説し学生や社会人を教育指導したことが挙げられます。ですから明治維新後、日本の近代化が順調に進んだのもその基礎を築くという意味で和魂洋才を教えた拙堂の力は大きかったと言えるでしょう。

拙堂の生きた時代と現在を比べると大変似て

いると思います。それは今日のグローバル資本の攻勢は第二の黒船と言えるからです。グローバル資本は弱者切り捨てです。この攻勢に対処するため、貧農を救えと説いた拙堂から学ぶべきことは多いのです。

拙堂の文学作品は多くの人に愛読されましたが、それは拙堂が感性豊かな人であったからでしょう。その感性こそは貧しい農民を救えという彼の主張にも示されたと言えます。今は経済優先の時代ですが、経済とは本来「経国済民」でなければなりません。本当の「経済」とは何かを今の政治家官僚は、拙堂から学んで欲しいと思います。

このような拙堂を郷土の誇りとして語り継いでもらいたいです。そのため私は拙堂について知る限りのことを皆さんにお伝えします。皆さんのなかで一人でも多くの方が語り部となって拙堂のことを若い世代に伝えて頂きたい、そして日本の将来を担う人々が拙堂から多くのことを学び、「富民強国」を実現してもらいたいというのが私の念願です。

拙堂塾への思い	齋藤正和 1	津カルタに齋藤拙堂登場	4
拙堂百五十五回忌に想ふ	加藤龍宗 2	令和元年度下期の行事予定	6
「ニコライ遭難」を読んで	飯田俊司 2	齋藤拙堂胸像寄贈	6
藩校有造館建学の流れーその一	中川禎二 3	津市公民館に於いて齋藤拙堂の顕彰講話	6
「養正寮掟」		会員一覧・役員一覧	7
拙堂塾に参加して		ホームページ開設のお知らせ	8
		追悼の辞	8
		編集後記	8

拙堂百五十五回忌に想ふ

会長 加藤 龍宗



令和と改元され、早や七ヶ月が過ぎた。大化より数えて二四八番目の元号です。平成までの元号は中国の古典より引用されてきたが初めて吾国最古の歌集、万葉集より採用された、巻五梅花の宴の序文「初春の令月にして、気淑く風和らぐ」と格調高く詠われた中からである。恐らく山上憶良によって作られたものであろう。万葉集は、奈良時代大伴家持等の手によって編纂され、四五一六首の歌で構成されている。その中に次の歌がある。「冬過ぎて春し来たれば、年月は新たなれども人は古りゆく」一八八四詠人しらず、冬が過ぎ、春がやってくる、新しい年を迎え目出たいが、人は老いてゆく、と対比の面白みを詠っている。万葉の時代も今も変わらない自然の理を現わしたものだ。いかに文明が発達しようとも自然に勝るものはないのです。

自然との共生を考える令和の年であろう。さて、当顕彰会は拙堂生誕二百二十年の歳に設立された（拙堂一七九七〜一八六五年）、明年は没後百五十五年の節目の年となる、この年こそ拙堂に学ぶ好機と捉えて頂きたい。拙堂の詩を紹介しましょう。

拙堂も万葉集を学んだことがよく分ります。

春風 斎藤拙堂

花を吹いて

髪端に上るを

只恐る

人の老いを催し

芳雪

団を成して簇る

番番として

風信致り

春風が吹き、花が咲き、良い季節となったが人は老い、花が散ることく髪が白くなる。と花の美しさと、老いによる髪の白さをより具体的に対比している。万葉歌も拙堂詩も共に新年の有難さと、人生の儂さの対比を面白く詠い、「今」の大切さを教えてくれています。令和二年会員の皆様のご健勝を切に願ってやみません。

「ニコライ遭難」を読んで

理事長 飯田 俊司



本年六月末に五十三年間勤務した銀行を退職、ようやく悠々自適の生活に入れるかと期待したが、多少のボランティア活動は残っているので、完全に自由になったとは言えない。それにしても、精神的には随分気楽になったので、最近好きな作家の一人である吉村昭著の小説「ニコライ遭難」を読んだ。

これは、明治二十四年（一八九一）日本を訪問中のロシア皇太子のニコライ親王に対し、五月十一日沿道警備中の滋賀県守山警察の津田三蔵巡査が刀で切りつけたという大津事件を題材にしたものである。津田三蔵は元政元年（一八五五）藤堂藩江戸屋敷で生まれた元藤堂藩士であった。父は藤堂藩医で、九歳から十五歳（一八六四年〜一八七〇年）まで、藩校に学んだという。

齋藤拙堂が藩校「有造館」の督学に就任したのは弘化元年(一八四四)、安政六年(一八五九)に致仕しているので、五年の違いで津田三蔵に藩校で教えることはなかった。

欧米列強が鎖国下の日本に開国を迫った情勢下、「海防策」などを著し、日本を守る方策を研究し、特にロシア、イギリスを警戒すべきと考えていた拙堂から直接薫陶を受けていたら、この事件は起こっていたか。

さらにこの話は重大犯人の津田三蔵の裁判へと続く。いわば国賓扱いで来た大国のロシア皇太子を未遂に終わったとはいえ、殺害しようとしたのであるから、政府としては過大な賠償が強要されるか、場合によっては戦争に発展することを恐れ、裁判では死刑の判決を要求した。これに対して司法関係者は他国の皇太子に対しては一般の謀殺未遂罪を適用、無期懲役とするのが法的に正しいとして、政府と司法が国の存亡をかけた争いとなった。最終的に判決は無期懲役となり、司法の独立が守られた。最終的に日本は天皇以下政府が挙がってロシアに謝罪した結果、賠償の要求もなく、戦争にも至らなかった。

昨年韓国大法院は、いわゆる徴用工判決で損害賠償請求権を認めて日本企業に賠償金の支払いを命じた。これに対して日本政府は一九六五年の日韓基本条約に基づき、韓国政府の支払いを求めたが、韓国政府は司法の判断には介入で

きないと拒否したまま、日韓関係を大きく損ねる事態に発展している。

表面的には大津事件も徴用工裁判も近代法治

藩校有造館建学の流れ―その二

養正寮掟

顧問 中川 禎二



戊辰戦争、会津白虎隊の決死の覚悟は、会津藩校日新館の子弟六歳から九歳までの児童訓「什の掟」ならぬ事はならぬものです」の教育にあるといわれています。

では、齋藤拙堂が督学をしていた有造館にも「掟」があることをご承知でしょうか？有造館の教育は、「文武忠孝」を理念としておりますが、九歳から十五歳までの藩士子弟には「養正寮掟」の校規があつて、読書・手習・算術・礼節が教えられました。

国家であれば当然の司法の独立が守られているというところであるが、何となく解せない気がする。世界はどう判断しているのでしょうか。

生徒数は約二百名で、授業料は藩士の禄高にスライドし、下級子弟でも受けられる公平な教育制度で、句読の教科書は四書・五経が中心で、習字は千字文・唐詩百絶などが用いられました。「養正寮掟」は十二箇条七二〇字余となっております。第一条のみ記すと

一、読書手習の子供、士の行儀相嗜み、作法正しく神妙に仕るべく候。起居、振舞騒がしきこと相慎み往来の途中に於ても悪びれ申すまじき事。とあります。

二条以下は子供の行儀作法が中心で、更に長幼の順・貴賤の分を守り非礼ならぬ事・読書、手習が済めば武芸に励む事が訓示されております。現在の養成小学校はこの養正寮が源流です。つづきは次号で。

(参考資料：津市史第三巻・人材を生み出した風土)



養正小学校校章

藤堂家の家紋(篇文)がデザインの基本となっている

拙堂塾に参加して

■高岡 弘典

本年七月に新規の個人会員として入会させて頂いた高岡弘典（たかおかひろのり）と申します。大学（院）では中国文学・思想を専攻しており、現在は公立高校で国語の教員をしております。二年前の八月に齋藤正和先生が講師を務められた三重県高等学校国語教育研究会主催の夏季研修に参加したことが縁の始まりでした。以来、津市内に住居を構えたこともあり、拙堂に関する話題に触れることが多くなり、仕事仲間である澤口真理さんのお誘いもあり、拙堂塾にて皆さんと一緒に学ばせて頂いております。

従前より吉野朝廷（南朝）に興味があり、昨年、津市の美杉ふるさと資料館に行った際にレプリカとして展示してあった拙堂の『伊勢国司記略』の存在を知りました。この九月より塾で講読している拙堂の遺文の中には「白米城」や「多氣」といった拙堂と北畠氏や南朝との関わりを示すものも多くみられ、大変興味深いです。とはいえ、拙堂の残した漢文や国文を原文のままに読むというのは甚だ難しく感じます。

塾の中で四十代の自分はまだまだ若輩者です。この「塾活」を通して、自身の読解力を磨き、諸先輩方との交わりから人間としての幅も広げ、少しでも顕彰会の発展に貢献できるよう精進して

参りたく、今後のご指導・ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

■澤口 真理

拙堂との初めての出会いは、大学三年生のときにかけてた書店で開催されていた拙堂展でした。たしか二十三号線沿いの、御殿場書房か御殿場書店という名前の本屋さんでした。当時車の運転をしなかった私が一体何のために、どうやってその書店へ行ったのか、今はもう思い出せません。しかし、その後ゼミの先生に報告すると「卒論のテーマはもう決まったね」とにっこりされたことを覚えています。

当時私は漢文学のゼミに所属しており、蘇軾の詩文や日本の江戸時代の漢文を中心に読んでいました。ゼミには毎回出席していましたが、それほど自主的に学ぶ学生ではなかったため、卒業論文も底の浅いものになってしまいました。もっと学んでおけば良かったと思います。ただ、私にとって、漢文はさっぱりしていて、語彙に深みのある美しさをたたえているところが当時も今も大きな魅力です。また、拙堂の紀行文詩を読むにあたっては聞き覚えのある土地の名前が出てくるのも楽しく、わくわくしながら読み解く時間を得ました。

その後二十年以上が経って、このたび拙堂顕彰会に入会させていただきました。あちこちへ旅をした拙堂に、私もあちこちへ寄り道をしつつ導かれているような気がしてなりません。

津カルタに齋藤拙堂登場

子供たちに津市の歴史や文化、名所などを遊びながら知ってもらおうと企画された「津カルタ」が完成され、市内の小中学校や幼稚園、保育園に配布されました。

津の偉人には前葉市長が谷川士清、齋藤正和顧問が齋藤拙堂にそれぞれ扮し、㊦のカードで登場します。

このカルタで多くの方々に齋藤拙堂を知っていただけることを期待します。

なお、カルタは津観光協会（津アスト内）で販売されています。価格は1,650円（税込み）



齋藤拙堂顕彰吟道大会

令和二年三月二十二日（日）、津市吟剣詩舞道連盟主催・津市共催・齋藤拙堂顕彰会後援の第四回齋藤拙堂顕彰吟道大会が開催されます。
 なお、当日「齋藤拙堂顕彰・俳句・短歌」の表彰式を行い、優秀作品が吟じられます。
入場は無料。ご来場を歓迎します

日時 令和二年三月二十二日（日）
 午前十一時三十分から四時三十分
 場所 津市大門七―十五
 津市センターパレス二階
 中央公民館ホール

参加要領

各会一〇題まで。吟題は齋藤拙堂または拙堂にゆかりのある方の作品。時間の関係で絶句・短歌・和歌・俳句に限ります。

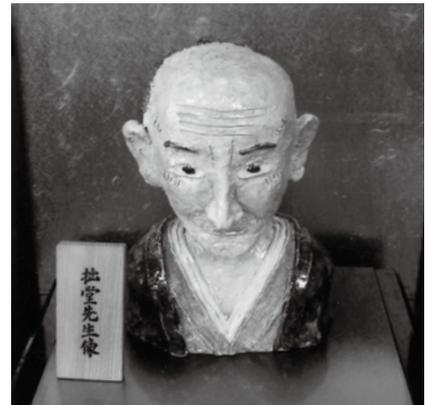
参加費は一題五百円。申込締切りは令和元年十二月二十日

申込先

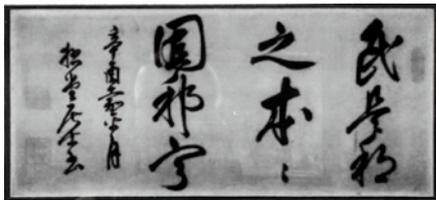
吟道大会担当 米田豊山理事
 (☎059-226-2465)



齋藤拙堂胸像 寄贈



加藤龍宗会長は、齋藤拙堂胸像（陶器製）を令和元年七月三十一日に津市へ寄贈されました。拙堂胸像は、津市市長室の控室に展示されています。
 拙堂胸像は、世界で一品のもので、作者は葛山兼才氏、銘書は稲垣無得先生です。



齋藤拙堂書

「民是邦之本々固邦寧

辛酉嘉平月 拙堂居士書

（民はこれ邦の本なり、本固ければ邦寧し）

『書経』の「五子之歌」の一節、「民惟邦本 本固邦寧」を書いたもので、「人民は国の基本である 根本がしっかりしていれば国家は安泰である」といった意味を書いたものです。
 「辛酉嘉平月」から文久元年（1861）12月に書いたものとわかります。

津市公民館に於いて 齋藤拙堂の顕彰講話

津市は毎年シニアを対象に寿大学を開催いたしております。
 本年は「二〇一九年度地域力創造セミナー」を開講するにあたり拙堂会も協力することになりました。
 顕彰活動として左記の通り開催致しました。

一、日時 令和元年五月二十三日

場所 津市橋北公民館「いきいきライブ」
 講師 拙堂会顧問 齋藤正和先生
 演題 「齋藤拙堂の人物と事績」

二、日時 令和元年十月二日

場所 津市中央公民館「寿セミナー」
 講師 拙堂会顧問 齋藤正和先生
 演題 「齋藤拙堂に学ぼう」

三、日時 令和元年十一月十五日

場所 津南防災コミュニティセンター
 （七月にオープンした津市南地区の新しいコミュニティセンター）

講師 拙堂会会長 加藤龍宗先生
 演題 「齋藤拙堂と月ヶ瀬の観梅」

何れも寿大学受講者のシニア男女約三五名、六〇名が参加され興味深く受講され盛会でした。

会員一覧

令和元年
九月三十日現在

● 団体会員

(順不同・敬称略)

- 株式会社百五総合研究所
- 伊藤印刷株式会社
- 二松学舎大学松苓会三重県支部朋友会
- 株式会社百五銀行
- 公益社団法人日本吟道学院水心会
- 三重交通株式会社
- 百五リース株式会社
- 公益社団法人日本詩吟学院津岳風会
- 岡三証券株式会社津支店
- 株式会社ZTV
- 百五証券株式会社
- 株式会社刀根菓子館
- 錦水流淡翠吟詠会
- 水远流詩吟朗詠会
- 株式会社百五カード
- 藤貴流扇和会三重県本部
- ミフジ株式会社
- 比佐豆知神社
- 社会福祉法人三鈴会さくら保育園
- 株式会社ヘルシーファミリー
- 井村屋グループ株式会社
- 株式会社ぜにやH・C
- 株式会社ヘリテッジホームデザイン

株式会社辻工務店
 三重トヨペット株式会社
 一般財団法人三重県環境保全事業団

● 個人会員

(順不同・敬称略)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|
| 赤塚 聰 | 赤塚 敬一 | 赤塚 奉裕 | 赤野 多恵 | 浅田 剛夫 | 阿部みどり | 荒川 猛 | 飯田 俊司 | 飯田 俊英 | 飯田 泰之 | 池上 悦美 | 池川 誠一 | 石野 孝廣 | 板谷ツヤ子 | 伊藤 英次 | 伊藤 歳恭 | 伊藤 武治 | 伊藤 鏡造 | 稲垣 武嗣 | 稲葉 邦成 | 井上 明美 | 井ノ口輔胖 | 岩崎 克彦 | | | | | | | | |
| 上島 正明 | 内田 観成 | 梅田 安春 | 浦出 雅人 | 海老原初夫 | 大井 和人 | 大森 芳二 | 岡 重夫 | 小川 直紀 | 奥田 榮子 | 奥田 則子 | 勝真 千代 | 葛山 丕 | 加藤 栄 | 加藤 恒二 | 加藤 龍宗 | 金児 玲子 | 川合 俊平 | 川西みどり | 河村ツタ子 | 神田 奉真 | 木崎 真陽 | 喜田 恭子 | | | | | | | | |
| 北畠 久子 | 木下 昇 | 紀平 奉剣 | 紀平 嘉信 | 草深 観雙 | 楠 久子 | 雲井 敬 | 雲井 純 | 栗真 恵光 | 見並 勤子 | 粉川 孝英 | 國分 昭男 | 児玉 進 | 後藤 晃一 | 小林 貴虎 | 齋藤 国子 | 齋藤 佐知子 | 齋藤 正晃 | 齋藤 正和 | 齋藤 正人 | 酒井 宏明 | 坂部 竜也 | 佐々木とし子 | | | | | | | | |
| 澤口 真理 | 下村 尚治 | 菅野 克也 | 杉浦 雅和 | 村主 英明 | 世古 浩 | 高岡 弘典 | 高沖 芳寿 | 高倉ふじ子 | 高山 尚 | 瀧川 茜 | 竹内 雅明 | 武田 奉明 | 竹村 観扇 | 辰巳 清和 | 田中康一郎 | 田中 幸子 | 田中 智之 | 田中 秀人 | 田邊 礼子 | 田中 礼子 | 谷川原信雄 | 谷口 定男 | 種田 啓子 | 種田 真山 | 種田 真山 | 田矢 修介 | 近澤 太輔 | 塚澤 正 | 塚澤 洋 | 辻 保彦 |
| 辻本 當 | 津村 観耀 | 寺尾 正紀 | 寺田 観啓 | 富田 陽子 | 豊田 龍俊 | 内藤 華博 | 内藤 奉悠 | 中川 和子 | 中川 禎二 | 中川 弘文 | 長嶋紀美子 | 中島 伸子 | 中津 忠夫 | 中西ひろみ | 中根 利彦 | 中野 清 | 中村 昭子 | 中村美知子 | 長合 教実 | 西岡 慶子 | 西川 幾子 | 西田きみ子 | 野崎 耕治 | 長谷 茂 | 長谷川和秀 | 長谷川和秀 | 嶋山 彦和 | 林 朝子 | 林 信吾 | |
| 林 竹生 | 林 忠男 | 林口 朋一 | 葉山 俊郎 | 久岡 克美 | 深見 和正 | 福 正直 | 福島弘太郎 | 藤井 奉修 | 藤貴 静扇 | 藤澤 清志 | 淵脇 實博 | 別所富貴子 | 本田三千子 | 増田 迪子 | 増田 幸恵 | 松井 幸子 | 松村 勝順 | 水谷 観瑤 | 水谷 忠文 | 水谷 千春 | 宮武貴久恵 | 宮野 一郎 | 向坂 和也 | 村木 正二 | 村田 修 | 村田 文男 | 森岡 三和 | 森永 昌雄 | | |

顧問	理事	常務理事	理事	会長	役員
斎藤 正和	前葉 泰幸	菅野 克也	米田 豊山	三藤 治喜	藤貴 静扇
中川 禎二	伊藤 昭男	國分 昭男	山崎 満世	水谷 忠文	林 朝子
					中川 佐和子
					小林 貴虎
					岡 重夫
					伊藤 誠司
					飯田 俊司
					加藤 龍宗
					安村 久仁男
					伊藤 誠司
					稲垣 武嗣
					小川 直紀
					種田 真山

顧問 故上田豪氏（百五銀行会長）の後任に
百五銀行頭取 伊藤歳恭氏が就任されました。

役員人事

森永 千寿	森永 敏江	安村 久仁男	柳川 隆一	柳谷 剛	築田 和郎	山家 泉
山上 和美	山口 くみ	山崎 計	山崎 満世	山崎 龍雄	山中 利之	山本三千代
吉川ツネ子	吉田 壽	吉輪 康一	米田 豊山	若林 宏幸	渡辺 義彦	渡辺 鴻

拙堂会顧問上田豪様には令和元年八月二十五日ご逝去されました。ここに生前のご厚情に感謝申し上げますと共に謹んで哀悼の意を表します。上田様には、当会発足以来、百五銀行会長、石水博物館館長として大変お世話になりました事、衷心より御礼申し上げます。

追悼の辞

齋藤拙堂顕彰会ホームページ開設のお知らせ



当顕彰会の活動予定や実績などをお知らせするとともに、インターネットを介してより多くの方々に齋藤拙堂の功績をご覧いただける場として開設いたしました。開設したばかりですが、皆様にとって使いやすく、齋藤拙堂のことがわかりやすく伝えられるホームページを目指して内容の充実を図ってまいります。また新着情報で会員向けセミナーの拙堂塾について、今後の予定なども掲載していますので、ご覧いただき会員のみなさまには拙堂塾へご参加いただきたく思いますとともに、月1程度で情報更新を行い、発信してまいります。

何卒、齋藤拙堂顕彰会ホームページをご利用頂けますようお願い申し上げます。

ホームページ URL

<http://setsudo.jp/>



編集後記

広報の担当が交代し、今号が初めての担当となりました。原稿依頼から、編集など慣れていないことで会員・役員のみなさまにはご迷惑おかけすることもあるかと思いますが、今後ともよろしく願います。(F&I)